

## 中学校の選択・学校裁量時間の構想と実践

### (1) 選択・学校裁量時間の教育課程上の考え方

新しい中学校学習指導要領による教育課程は、1993年度中学1年生から3年生までのすべての学年で実施にうつされる。今回の教育課程の特色は、中学校の段階において生徒の個性の多様化が一層進むことに注目し、一人一人の個性に応じた教育を充実することにあるとされている。

当校においても、教育課程を編成するにあたって、生徒の個性の多様化に対応した教育活動の実践を可能にする方法を検討し、課題学習という枠組みのなかで、各教科あるいは学年が、それぞれの計画のもとに展開することになった。

現段階においては、多教科にわたる選択という立場はとっていないが、それぞれの教科の授業や学校裁量時間の効果的な運用によって、生徒一人一人の興味・関心に応じた選択学習を実現出来るように教育課程を編成した。

なお、学校5日制の実施にむかっての、教育課程の検討の段階においては、この構想の再検討が必要になると考えている。

### (2) 本校における「選択・学校裁量時間」の位置づけ

学校教育課程表

区 分		第 1 学 年	第 2 学 年	第 3 学 年
必修 教科	国 語	4	5	4
	社 会	4	4	3
	数 学	3	4	4
	理 科	4	2	4
	音 楽	2	2	1
	美 術	2	2	1
	保 健 体 育	3	3	3
	技 術 ・ 家 庭	2	2	3
選教 択科	外国語(英語)	4	4	4
	保 健 体 育	0	0	1
道 徳		1	1	1
学 級 活 動		1	1	1
授 業 時 間 数		3 0	3 0	3 0

学校裁量の時間	第 1 学 年	第 2 学 年	第 3 学 年
特別活動の時間	1	1	1
ラ イ フ	1	0	0
課 題 学 習	1	2	2

現行の教育課程においては、学校裁量時間の3時間のうち、2時間を教科の活動を基盤においた「統合A」に、1時間を学級活動を基盤においた「統合B」にあて、生徒の個性に応じた統合学習をすすめてきた。今回の改訂においては統合学習を発展的に改め、課題学習の一部をここに位置づけることになった。

また第1学年においては、1時間を教科以外の領域の活動をする時間に位置づけ、「ライフ」と命名した。この時間は生徒自らが、生きて生きていくことの価値や自らの人生を切り拓く基礎力を身につける場として位置づけている。

①選択・学校裁量時間の配当と学習

ア) 学校裁量時間のうち1時間は、特別活動の時間とする。特別活動の時間は、クラブ活動や生徒会活動の時間とする。

イ) 残りの学裁量時間は、つぎのように課題学習に配当する。

第1学年 国語 ・ 「ライフ」

第2学年 理科 ・ 芸術

第3学年 数学 ・ 社会

ウ) 第3学年の選択の時間は、保健体育にあてる。保健体育については、この時間を利用して課題学習を行う。

エ) 技術家庭・英語においては、教科に配当された授業のなかで、個性の多様化に対応した課題学習を行う。

②教科における課題学習の内容

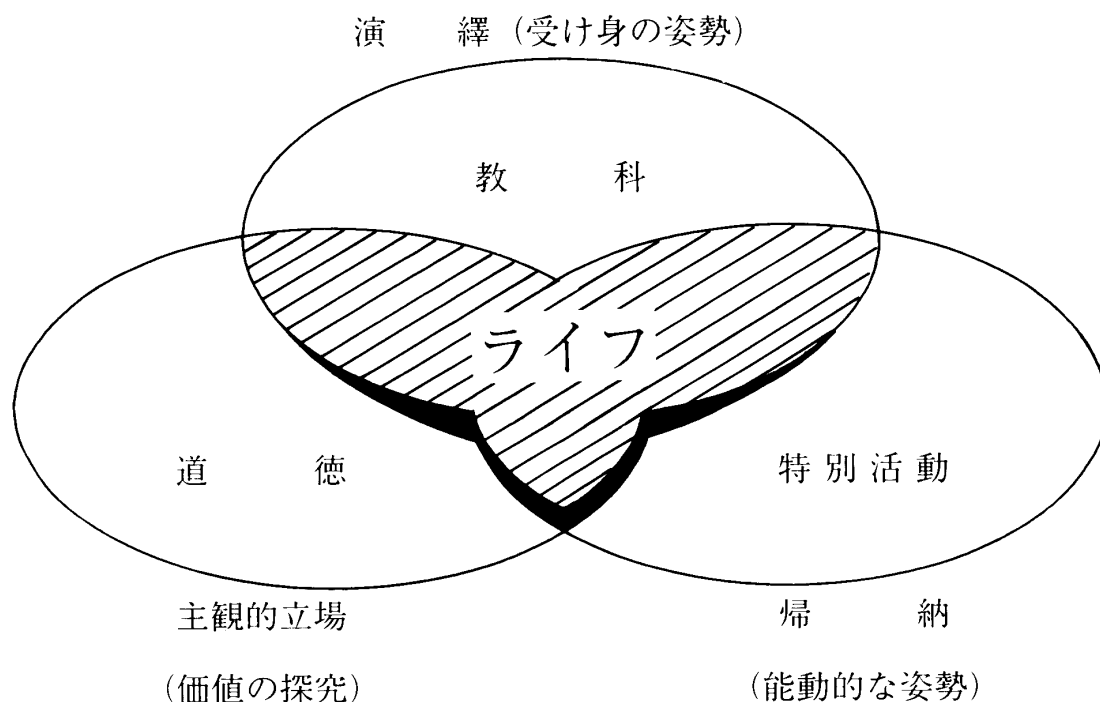
課題学習と選択の内容は、教科的色彩を強め、学習内容は教科の主体性によって、下記のとおり計画した。

教科	学 習 の 内 容	形 態	評価の比率
国語	1年 硬筆指導 ひらがな 3分の1 漢字 3分の2	分散	4 : 1
	2年 毛筆指導		
社会	3年 国際理解の推進をめざす 主題学習 地理：日本の諸地域を中心とした地理学習 歴史：近代史を中心とした歴史学習 公民：現代の国際社会と平和	分散	3 : 1
数学	3年 1単元 5～8時間のセミナー形式の学習 個に応じた指導、個性を生かした学習を集団指導の中で生かす ・教具の工夫、模型の作成 ・コンピューターの利用 ・新しい問題の作成	同時展開	3クラス 5 : 1
理科	2年 第一分野：物質と電子 : 電流 第二分野：生物どうしのつながり : 天気の変化 4つの項目ごとにテーマを設定し、4～6時間の学習を行う 時期は、授業の流れに合わせて適切な時期とする	2時間 連続2時間を 2名の教官で 担当	2 : 1
芸術	2年 音楽・美術：日本の歴史や諸外国の歴史を考えながら芸術を理解し、鑑賞する能力や創造する能力を養う	3クラス 同時展開	参考程度
体育	3年 必修教科の体育分野の内容に示してあるもの以外の運動も含めた形で の学習を展開する 「一輪車運動」……………10時間 2学期の3～4週で行う	現行の授業 クラス編成	3 : 1 (2学期)
技術 家庭	学年指定なし 新教育過程に基づく、授業の中で、課題学習的な学習活動を組み込んでゆく	分散	
英語	学年指定なし 生徒各自の自主的・自発的学習の充実 1. 基礎的・基本的事項の補充と深化 2. 日常生活に関する会話やヒアリングの充実 LL教室の利用の促進 AETと授業担当教官とのチームティーチングの導入	分散	

### (3) 1年の教科外課題学習「ライフ」の構想

中・高6ヶ年一貫教育を実施してゆくためには、6ヶ年は余りにも長期間にわたる教育体制であるだけに、各教科、特別活動及び道德のそれぞれの活動における目標が明確化される必要がある。しかし、それ以上に、生徒にとっては、3領域を統合的に考え、6ヶ年という長期にわたる学生生活をいかに過ごしてゆくかが大きな問題となっている。そこで、中学校に入学した一年間で、6年間何をめざして活動してゆけばよいのか、指導する教師、自主的な活動をすすめる生徒の両者が、明らかにする必要がある。

そこで本校がかねてから実践してきた「ゆとりの時間」の考え方を踏襲しながら、かつ、生徒自らが生きていくことの価値や自らの人生を切り拓く基礎力を養う時間を設定し、「ライフ」と命名した。そして、生徒の自主的・主体的活動として創造的に活動した結果の発表の場を保障してゆきたい。



1年の教科外課題学習「ライフ」の目標と展開は、次のとおりである。

- 1) 計画の立案・推進……………研究部長・1年担任
- 2) 生徒指導……………1年HR担任
- 3) 実施時間……………月曜日の5限を道徳、6限を課題学習とし、中学1年一斉で実施する。
- 4) 課題学習の内容と指導者
  - ア. 福山中・高等学校を知る。

中学1年の授業を担当していない教官が1年間1度担当する。  
内容によっては、2時間連続で行うこともある。
  - イ. 学校外の社会を知る。

社会で活躍している人、卒業生、かつての福山附属中・高校に勤務された先生等様々な方々の講話を通して、視野を広くする場をつくる。

ウ. 創造的な活動を年間に少なくとも1つは行う。

エ. この課題学習には、他の学年を参加させることが出来る。この場合に必要な時間は、各教科に割り当てた課題学習の時間を利用する。

# 国語科

## ——活字世代における書写指導のあり方——

江草 洋和

ここ数年間のワープロの普及には目覚ましいものがある。この原稿自体もワープロによるものであるが、その外の書類もワープロ原稿によるものがほとんどとなってきた。つまり現在では日本語の表記は、その大半が活字（さらに大半は明朝体）によってなされていると考えてよかろう。明朝体は元来毛筆の書体（厳密には楷書の書風の一種であろうが）から生まれたものである。しかし、現在の明朝体は、文字の成り立ちからいうと問題点を多々含んでおり、それが活字しか目にするここのない世代にはかなりの悪影響を及ぼしている。そうした状況ではあるが、手書きの機会は少なからずあるし、本来の文字の姿を記憶に留めておくことは大変重要なことだ。今回は、中学校1年生に週1時間の授業ではあるが、年間を通して硬筆でそのことをじっくりと学んでほしいと考える。

### 1. 教科の目標

伝達的手段としてのみ文字をとらえれば、各人が各様の字を書くよりも同じ字を書いた方がよい。読み易さという要素だけを考えれば、個性を徹底的に排除した「活字」が便利であろう。ところが、漢字は（日本の文字は中国からの借り物であるから同じ事）そうではないところで成立した。それを完全に教えるのは芸術科の書道であって、国語科の書写としてはやはり読み易くきれいな文字を書くことを目標とする。ただ、この読み易くきれいな文字が決して現在の活字のように機械的なものではなく、歴史的な裏づけをもった生きた形でなければならない。

### 2. 年間の実践の概要

生徒に知っておいてほしいことは大きく分けて二つある。一つは前述してきた通り文字の形の取り方、もう一つは主な書式である。

まずは文字の形についてであるが、これは日常使用頻度の高い「平仮名」「楷書」「行書」を扱う。平仮名は平安時代中期に、楷書は初唐に、行書は東晋に書かれた文字の中から最大公約数的なものが基準となる。それぞれに3時間・7時間・5時間をかけて練習した。

平仮名は、漢字の草書が元になった文字であるから、少々不安定である。記号性が弱いともいえる。それは、一つには左右対称性が希薄ということだ。例えば「ひ」「ゆ」に典型的に見られるように、これらの活字は左右が対称的に出来ているが、手書きの文字ではこれを極端に避ける。「ひ」は頭をもっと右に傾けるし、「ゆ」の真ん中の縦画は右に寄せて書く。また、文字を記号化するには、同じような部分を全く同じにすれば良い。例えば「な、ぬ、ね、は、ほ、ま、よ」は活字で見ると最後の、結ぶ部分に何ら区別はない。ところが、文字の成り立ちからいうと「な、ね、ほ、ま」と「ぬ、は、よ」は異なる。前者は、後者に比べ、少し三角に回った方がよい。あるいは、「ぬ」という字は「め」という字の最後の部分を回しただけではない。形が根本的に違うのである。

漢字は、楷書にしても行書にしても右上がりの書体である。また、横画、特に長い横画は直線で

はない。これらが、特に活字と異なる大きなポイントといえよう。部分的に見ると、画の接し方についていうと、右の縦画と下の横画で、「日、目、田」などはこの様に縦画の方が出れば良いのであるが、「口」の場合は横画が出なければならない。あるいは、縦横の画が多い場合は間を均等に持って行くのは活字でもそうになっているが、長さに大きな問題がある。分かり易い例でいうと「美」は「羊」の横画を短く、「大」の部分だけを長くという風に、横画が重なる場合はその中の一本だけ伸ばすことが多い。しかし「堂、重」などは一番下ではなく、それぞれ、冠、上から二番目の横画を長くした方がバランスが良くなる。また「世」という字の縦画はこの様に揃えるのではなく、真ん中、右、左の順に高く書く。行書は、楷書をよく知っていなければならない部分と、筆順も含めて楷書とは異なる部分があるが、いずれにしても数を書いて慣れるのに時間がかかる。

筆順も重要である。筆順自体もさることながら、これが画の接し方、形にも影響してくることもあるからだ。特に間違い安い字でいうと、「成」は「一」ではなく「ノ」から書き始めるし、「長、巨、臣、馬」はいずれも縦画から先に書くのだが、これを間違えると画の接し方が変わる。「右、左」の横画の長さの違いも筆順と密接な関係がある。

以上が文字の形の取り方であるが、こういうことを知った上でいろいろな紙面に漢字仮名まじりの文章が書けなければ、あまり意味がない。漢字仮名まじり文では漢字の方を大き目に書くということに注意して、縦・横の罫線の入った用紙、はがき、原稿用紙等にした。各2～3時間かけた。

日本語に横書き（左から書く）が登場したのは、かなり最近の事であろう。英語や数字に合わせてのことだと考えられる。本来、英語等の筆記体は左回転系の文字で横書きに適しているが、平仮名縦書きの中で生まれたので右回転系なのである。従って、漢字及び仮名を横に書くのは不自然なのだが、現在ではむしろこちらが主流になっており、その書式も身につけておかねばなるまい。横の罫線が入っている紙に書くには二通りの書き方がある。一つは罫線と罫線の真ん中に一本の線を想定し、そこに文字の中心を持って行くやり方。もう一つはもう少し下に線を想定し下の罫線からわずかに浮かせる形で書く仕方である。便箋のように縦に罫線のある場合は、あくまでも中心に書けば良い。葉書では罫線の無いところへまっすぐに書かねばならないところが難しい。文字の大きさ、行間の目算が重要となる。もちろん、原稿用紙も含めて、必要な最低限の書式は学んだ。

### 3. まとめ

きれいな文字を書くには素晴らしい字を見ることから始めなければならない。ところが、前に書いた通りその機会は現在では極めて少ない。週一時間の授業で、どれだけその役割を果たすことが出来たのか。知識として身につけることは簡単だが、感覚として身につけることは決して容易ではない。文字の上達というのは、ある特定の文字ばかり練習していればその文字がうまく書けるのではない。正しい感覚が身につくと書いたことのない文字でもうまく書ける。そのように、生徒の感覚を根底のところから少しでもゆさぶる授業を展開出来ればと工夫した。なかなか全員がなるのは無理のようである。その中で、練習・添削を繰り返すうちに本当に教えられた内容を理解し、変わったといえる生徒は、クラスに2～3名程度ではあるが、見られた。

# 社 会 科

## 1. 社会科の目標

生徒が現代社会において主体的に学び続けることができるように、必要となる技能を育成する。

## 2. 年間実践の概要

社会科は3人の教官（岩永、鶴木、大江）が担当し、各教官がそれぞれ学期ごとに独自のテーマを設定し、実践するという形式をとった。

1学期…担当：大江、学習テーマ：近代日本の形成と現代の日本

2学期…担当：岩永、学習テーマ：国際社会と日本

3学期…担当：鶴木、学習テーマ：国際社会と国際平和

## 3. 具体的な実践例

### 《大江》

1学期の課題学習は歴史的分野を中心に、近代のテーマ史を題材として行った。

週の授業時間数は1時間であるので、できるだけ広い範囲を網羅し、歴史の流れも容易に理解できるような形式を目指した。また、自主的な学習を行わせる意味で、班単位で発表形式の授業も取り入れることとした。1学期の前半は、講義形式の授業が中心であった。これは、江戸時代の後期（黒船の来航）から明治時代への時期を、「近世から近代へ」という政治史のテーマ学習として3時間、明治時代の日本が国際的近代国家をめざして国家形態を整えてゆく時代を、「近代日本と国家」として経済的側面を入れて2時間、大正から昭和にかけての帝国主義的資本主義の成立と、その発展や矛盾を中心に、「対外侵略と日本」として、戦争と民衆のかかわり合いにも触れながら3時間を使用した。1学期の後半には、「明治維新」というテーマで、人物学習を行わせた。ここでは、「大久保利通」、「坂本龍馬」、「木戸孝允」、「大隈重信」の4人に注目させ、クラスを4つの班に分けた後、図書室等で1時間を使用して各人物の出身藩とその業績などについて調べさせ、次の時間に各班ごとに約15分の発表を行わせた。さらに次の時間、前の時間に生徒が調べきれなかった、日本の国際的立場を考慮にいれた各人物の歴史的役割などを教員が補足してまとめた。人物学習では、教員側からのしぼるべきポイントが明確でなかったため、生徒がまごついていたり、週1時間の授業のため、発表の内容を忘れてしまっている生徒が多かったことが反省点である。発表形式の学習を第2学年の歴史的分野の学習にも取り入れることにより、このような形式の学習に慣れさせることが必要であると考えた。

### 《岩永》

担当領域が「歴史的分野」の世界史領域であり、また生徒の現代の社会に対する問題意識（課題）を把握するために、アンケートを行い、その結果「国際社会と日本—イギリス産業革命と現代の社会—」という学習テーマを設定し、授業を行った。

授業開始後まもなくで夏休みに入ることもあり、夏休みの課題として、特定の視点に立ってのイギリス産業革命についての調査、を義務づけた。提出された課題レポートをそれらの視点から4つ

のグループ（資本家・技術者に視点を置いたグループ、労働者に視点を置いたグループ、諸外国との関係に視点を置いたグループ、そしてイギリス社会の変化に視点を置いたグループ）に分け、それぞれのグループ単位の発表を中心とする授業を構成した。その授業構成は次の通りである。

- (1) アンケート調査… 1 時間
- (2) イギリス産業革命と現代社会… 1 時間
- (3) 発表準備… 2 時間
- (4) イギリス産業革命… 5 時間
  - ・ 発表の最終打ち合わせと発表資料等の準備… 1 時間
  - ・ 2つのグループの発表… 1 時間
  - ・ 2つのグループの発表… 1 時間
  - ・ 討議とまとめ… 2 時間
- (5) 産業革命と現代社会… 1 時間

なお、実践の詳細については、本紀要の個人研究の項で論じている。

#### 《鶴木》

「公民的分野」の課題は「国際社会と国際平和」というテーマとした。現代の日本は、冷戦終了という事態を受け、国際貢献やPKOなどの多くの課題を抱えており、将来、生徒は有権者として判断を下すことを迫られるであろう。授業では、生徒がこうした難しい論争的課題に取り組むことができるよう、概略的な知識を獲得し、その知識を基に論争（ディベート）するように構成した。以下に授業構成を示す。

- (1) 概略的な知識の獲得… 6 時間
  - ・ 国家（Nation）の形成（国家の役割）… 2 時間
  - ・ 冷戦終結後の国際情勢… 1 時間
  - ・ 国際社会における平和維持の論理… 3 時間
    - 戦争抑制の手段としてのバランス＝オブ＝パワーの考え方
    - 集団安全保障体制としての国際連合
- (2) 自衛隊の海外派遣についての論争… 3 時間
  - ・ 論争の方法についての説明（ディベートとは何か）… 1 時間
  - ・ 論争（肯定・否定の両方から論争に参加する）… 2 時間

#### 4. 反省と課題

課題学習が始まって2年目を迎えた。今年度は課題設定や、学習方法などに工夫を加え、生徒が主体的に学び続けることができるような技能を育成するという課題学習の目標の実現に取り組んできた。しかし、時間的な制約などもあり、十分な成果をあげることができたとはいえない。今後、生徒のより主体的な学習を保障するような新たな学習方法を取り入れていく必要があると考える。



# 数 学 科

## 1. 「課題学習」の目標

生徒の主体的な学習を促し、数学的な見方や考え方の育成を図るために、各領域の内容を総合したり、日常の事象に関連づけたりした適切な課題を設けて、それを生徒個々の特性に応じて多様な学習活動を展開できるように、作業、実験、調査などを工夫して取り扱っていくことを通常の指導計画に位置付けて実施していく。

## 2. 年間の実践の概要

### (1) 実施方法

A, B, C 3クラスの同時展開とし、それぞれのクラスの数学の担当教官3人が各クラスほぼ4時間ごとに持ち回りで担当した。すなわち、それぞれの教官が年間2つのテーマで3つのクラスを下のように2巡した。

教官N：A→B→C 「多角形の対称軸の本数について」、「対角線による5角形の分類について」

教官G：B→C→A 「あみだくじの性質や仕組みについて」、「雨樋の断面積の最大値について」

教官K：C→A→B 「数の列の規則性について」、「平面上の点の変換について」

この4時間の授業展開の中身は担当者に一任されているが、およそ次のようにして授業を展開していった。

1時間目 課題の提示

2時間目 個人のレポート作成開始

3時間目 班に分かれての話し合い

4時間目 班での代表作の発表会

「課題学習」では、生徒が主体的に問題に取り組み、数学的な活動をおこなう時間的・空間的機会を保証してやるのが大切なので、教師はその時間はあくまでアドバイザー役にとどまって、教室の中が多少にぎやかになっても、生徒が自由に教室内を歩き回って、生徒どうしで相談・議論しあったり、器具を用いたり参考書を調べたりすることを自由にさせるようにした。

### (2) 評価方法

中学校3年生では1週間に通常の数学の授業が4時間あり、それに加えて「課題学習」が1時間あるので、数学全体の評価の中の20%を割り当てることにした。ただし、この評価は1・2学期の成績評定には加算せず、学年末の最終評定に加算することにした。

評価の対象は生徒の提出したレポートのみである。授業中の生徒の取り組み方や態度はほとんど評価していない。机について独力で黙々とやっていく生徒と、数人で和気あいあいと相談しながらやる生徒との優劣をつけることはできない。実際、提出されたレポートを見れば、その生徒の課題への取り組みの深さがはっきりと現れているので、レポートのみによる評価で十分である。

具体的には、A：20点、B：15点、C：10点の3段階で評価した。内容的に素晴らしいものや独創的なものに高い評価を与えるのは当然だが、いわゆる「きちんとした」「ていねいな」ものにも

高い評価を与えている。

このような大まかな評価の方法は、教師の主観による曖昧なもののように思えるかも知れないが、この自由性こそが大切であると考えている。その課題の性質によって評価基準はまちまちであろうし、生徒のその課題へのアプローチの仕方も、論理的にせめる生徒もいれば、しらみつぶしで丹念に調べていく生徒もいるので、そうした様々なものをできるだけ認めていくためにも、より多くの多様な観点で肯定的に評価していきたいのである。細かく基準を定めて数量化して評価をする方法よりも、レポートからダイレクトに伝わってくるものを評価したい。

### 3. 実践例

「あみだくじの性質や仕組みを調べよう」

1時間目は、5本のあみだくじにおいて、そのスタートとゴールがちょうど逆の順番にするにはどのように横線を入れればよいか考えさせ、そこから発展させて、あみだくじの持つ性質について調べさせた。その結果、2時間目には、最初に与えたテーマのほかに、どうしてあみだくじの行き先は同じ場所に重ならないのか、スタートとゴールをちょうど同じ場所にするにはどのように横線を入れればよいか、行かせたい場所に自由に行かせるのに最低何本の横線が必要かなどのテーマが出てきた。最終的には、様々なテーマでのレポートが提出され、中には教師もまったく初めて知ったというような事実もあった。

### 4. 授業から得た問題点と今後の課題

#### (1) よい課題を開発すること

生徒の多様なアプローチを許し、生徒の知的好奇心を刺激して止まないような教材を開発すること、それは今後とも心掛け努力していかねばならない重要な課題である。様々な段階の生徒がそれぞれに何らかの方法で取り組んでいけるような、例えば、紙を折ったり切ったりしながら問題を発展させるような課題を開発していかねばならない。

#### (2) 「課題学習」における教師の役割

生徒の主体的活動をめざす「課題学習」では、教師が結論を押し付けたり、自分の考えている方向に強引に誘導するような「教え過ぎ」は慎むべきであろう。しかし、課題を与えて後は全く指導しなくてよい訳でもない。生徒の疑問にアドバイスを与えたり、まったく手をつけることのできない生徒に大まかな指針を示したり、面白いアイデアや考え方を賛美して自信を与えたりすることである。そのような、生徒の主体的活動に対する教師の教育的な介入はいかにあるべきか。

#### (3) 提出されたレポートのその後の取り扱い

生徒のレポートは、評価に用いるだけではなく、再びクラス全体に返してやるべきである。そうすれば、クラスメートがどんな方法でどのようなことを考えながらその課題に取り組んだかが分かって、このような学習スタイルへの前向きな姿勢を養うことになる。最後の時間に発表会を開いたり、生徒の作品を印刷して冊子に綴じて配布するなどいろいろ試みているが、どのような返し方がよいのか今後も模索していかねばならない。

# 理 科

## 1. 目標

1970年代から1980年代にかけて実施された調査（文部省到達度調査、国際教育到達度評価学会（IEA）の学力テスト、同実験テストと科学観テスト）の結果、わが国の理科教育には次のような特徴があることが明らかになった。

- ①知識面の理解は優れている。
- ②観察や実験の基礎的能力や自然を探究する能力・態度は十分には育成されていない。

今回の教育課程の編成に当たって問題となったのは、②である。自然の事物や現象についての知識理解はもちろん重要であるが、高度科学技術社会を支える市民の育成ということを考えるならば、自然を探究する科学的な見方や考え方の育成がそれにも増して重要である、と考えられるからである。新教育課程においてはこの点が重視されている。新教育課程で強調されている目標は次の3点である。

- ①観察・実験の一層の重視
- ②日常生活とのかかわりに配慮した内容の構成
- ③いろいろな活動を通して、自然を探究する態度と能力の育成

当校の理科の課題学習は、これらの目標を達成するために有効な新しい学習形態を開発していくことをテーマとして行われたものである。

生徒に主体的な学習を行わせるためには、彼らの興味や関心にマッチした題材を選ぶ必要がある。社会問題としてしばしばマスコミに取り上げられている環境問題は、生徒の関心がきわめて高く、課題学習の題材として最適である。2年間の理科の課題学習においては、生徒が実験や観察を主体的に企画し実施することによって、科学的な思考力を育成すること、また研究結果やレポートの作成は、表現力を育成するために特に重点をおいて指導した。

## 2. 授業実践の概要

理科の課題学習として第2学年に週1時間が割り当てられ、理科の時間数は合計3時間となった。課題学習を実施するに当たり、授業時間割の作成に当たって次のような配慮をした。①各クラスとも週1回は2時間連続の時間を作ること、②連続した時間は2名の教官が担当することができるようにすることである。ただし、課題学習は6月から9月にかけて短期間集中方式で行い、課題学習に当たった総時間数は、92年度においては33時間であった。

初年度は、次の2つの課題について学習した。①酸性雨について調べる。②新聞や雑誌の記事から、身の回りの自然環境問題を調べる。

①については、生徒が夏休みにそれぞれの自宅付近で集めた雨水を密封した容器に保管し、9月にpHメーターで水素イオン濃度を測定した。水素イオンについては本来2年生では扱っていない概念であるが、必要最小限の知識については前もって説明を加えておいた。②については、班単位

で資料を収集し、討論を加え、意見をまとめて9月の学友祭（文化祭）で成果を発表した。

1992年度は、前年度の成果と反省をふまえて、生徒の主体性の育成を目指す内容の授業にした。課題は「環境問題」とし、生徒はそれに適合するテーマを自由に選び、必要な実験・観察も自分達で計画し実施するようにした。学習の流れは次の表に示す。

(1) 準備段階 (18時間)

- ①基本的な実験操作、レポートの作成の指導 (11時間)
- ②必要な知識の学習 (2時間)
- ③ビデオ教材による問題提起 (5時間)

(2) 課題学習 (10時間)

環境問題の中から探求できる課題を設定し、実験・観察を行う。

- ①班の編成、課題の決定、計画書の作成と実験・観察の準備 (2時間)
- ②実験・観察 (5時間)
- ③結果の考察と反省 (2時間)
- ④レポートの作成 (1時間)

(3) 夏休みの課題のまとめ (1時間)

環境問題に関する新聞記事の収集（夏休みの課題）を通して、グループ討議を行い、自分たちにこれから何ができるか考えさせた。

(4) まとめ (4時間)

- ①発表準備 (3時間)
- ②研究発表 (1時間)

### 3. 成果と課題

環境問題についてはマスコミを通して情報が入ってくるので、生徒の関心はたいへん高い。しかし、環境問題を科学的に正しく理解しているとはいえない。そこで、環境問題のビデオ教材を視聴することによって、問題意識を高めることから始めた。その後、班ごとの話し合いを行って、それぞれのテーマを選ばせた。生徒が選んだテーマの中では、①水質汚染に関するもの、②洗剤に関するもの、③土に関するもの、が多かった。

テーマが決まっても、最初のうちは何から手をつけていいのか分からず、戸惑いが見られたが、9月の学友祭の準備段階からしだいに意識が盛り上がり、最後の研究発表の出来栄は教師の予想を上回るほどであった。研究発表会では、生徒に司会をさせたためか活発な意見交換がなされて、予想以上の成果をあげることができた。

問題点としては、次の3点を挙げておく。①2年生では基礎的な科学的知識を十分に学習していないので、課題学習にかなりの制約を伴うこと、②課題学習期間中に実験器具や試料を長期間保管しておくことがあるので、教室のやりくりが難しくなる、③準備期間や事後指導に最低10時間は確保しておく必要があるので、年間の学習計画全体にかなりの無理が生ずる。

# 保健体育科

## 1. はじめに

当校の保健体育科においては、従来から生涯体育・スポーツと学校体育のつながりについて考えてきたが、今回の教科の選択・裁量時間の学習では、中学校の学習指導要領にないものを取り入れて実施し、生徒の反応からさらにそのつながりについての考察を深めようとした。教材について実施可能なものをいろいろ検討したが、結果として一輪車運動を実施することとした。

学習指導要領の改定に伴い、小学校での一輪車運動の学習が実施されることになったが、既に多くの小学校で取り入れられているのを見聞するし、当校の生徒の中にも経験者は多い。発育・発達の過程からみた場合、巧緻性・平衡感覚などは小学校段階で高める方が当を得ているであろうが、それらの能力を必要とされる一輪車運動の実施が、中学校3年生の生徒にどのように受けとめられるのかを探ってみたい。

## 2. 実践の概要

- 1) 題 材 一輪車運動
- 2) 対 象 中学校3年生男女
- 3) 実施時期 男女で多少の違いはあるが、2学期から3学期にかけて15時間実施
- 4) 単元計画と学習内容

次のような時間配分と内容で実施した。

### ◎1時間目（オリエンテーション）

- 学習の進め方・練習の手順などの全体的な見通し、一輪車の各部の名称と扱いなどを、VTRを視聴しながら学習。

### ◎2～5時間目（屋内練習）

- 体育館2階の手すり部分を補助として利用し、乗車、バランス、アイドリング、初歩的な前進移動を練習しながら、バランス感覚を養う。

### ◎6～15時間目（屋外練習）

- ベンチや柱・友達を補助にしながら乗車し、補助者付きで前進する段階から、一人で乗車や前進ができるようにする。
- より長く、あるいはより速く乗れるようにする。
- 大回り・小回りができるようにする。
- アイドリング、ストップ、バックなどが一人でできるようにする。
- アスファルト面やグラウンドなど、地面の状況の違う場所で練習する。
- 能力に応じて、ボールつきやジグザグ走、また数人で肩を組んで乗るなどの動きの工夫をし、より楽しく乗れるようにする。
- お互いに工夫した動きを発表し合う。

### 3. 生徒の活動状況

学習内容に述べたような中身を「学習カード」として一覧表にまとめ、できるようになったらチェックしてゆく方法をとると共に、自分達が工夫した動きを記録できるようにした。

7割弱の生徒が、一人で乗車し、補助なしで10メートル以上進むことができるようになり、補助者がいないと乗れない生徒も、補助者がいれば20メートル以上は進むことができるようになった。また、2人、3人で肩を組めば、横に倒れる可能性が低くなるので、一人では十分に進めない生徒でも、意外に前進することができるようであった。十分に技能が伸びなかった生徒も、意欲的に取り組んでおり、技能の獲得をよりスムーズに行うためには、「平行棒や手すりなどがもっと欲しい」という意見もあり、補助施設の必要性を訴えるケースが多かった。さらに「一人に一台ずつ一輪車があればもっと練習できる」「2時間続きの授業で、もっと時間をかけて練習したい」などの意見も多く、技能の習得には、十分な練習の「場」の保障の必要性がうかがえる。

学習カードに載せた学習内容以外に、自分達で工夫した動きとしては、「競争（距離・スピード）」「リレー」「縄跳び」「ボールつき・パス」「階段を降りる」「起伏にとんだ場所を走る」「長時間乗り続ける」「土手のような急な坂を下る」「立ちこぎ（サドルから腰を浮かしてペダルを踏む）」「スピン」「肩を組んで前進（2列、3列……）」「風車（軸から2列・3列に放射状に肩を組み、風車のようにくるくる回る）」「メリーゴーランド（後ろから肩に手をかけて円になり、いっせいに動く）」などがあり、難度の高い技に挑戦するだけでなく、友達と楽しむ工夫もみられた。さらに、「フラフープをやってみたい」「長縄跳びをみんなでやってみたい」など、今後の発展性も考えていたようである。

### 4. おわりに

全体の6割ほどの生徒が、小学校のときに一輪車運動を経験しており、中には自分で一輪車もっており、自宅で練習している生徒もいた。

中学校で一輪車運動の学習を実施すると聞いて、小学校での経験者のうち、既に一人で乗っていた生徒は、「まだ乗れるだろうか」といった疑問を抱きながらも、「うれしい」「楽しそうだ」という期待感をもっていた。一方、乗れていなかった生徒や未経験の生徒の多くは、「今度は乗ってやろう」「楽しそう」「乗れたらいいな」という意欲や期待がある反面、「乗れるのだろうか」「乗れないだろう」「こわい」「いや」という不安を抱えていた。

実際にやってみて、何とか乗れるようになった生徒は、「楽しかった」「乗ることができて嬉しい」などの意見を述べるものが多く、思うように乗れなかった生徒は、「難しい」「こわい」「バランスがとれない」「自転車と違う」などの感想をもっていた。最後まで、補助者がいないと何もできない生徒が男女とも数名おり、できるできないがはっきり示される一輪車運動の学習においては、できるようにするための指導の工夫が必要であることを痛感させられた。従前にはない一輪車運動の学習が、生涯体育・スポーツにつながるかどうか十分に検討はできなかったが、中学校3年生での実施という学習の時期については、十分生徒に受け入れられたと思う。当初の候補としてあげていたアイススケートなどと共に、今後さらに検討してみたい。

## 芸術科

今年度は音楽、美術の2科で2年生を対象に、音楽2クラス、美術1クラス（音楽選択者65名、美術選択者52名）の同時展開で課題学習を実施した。学習内容としては、普段の授業より一歩突き進み、日本や諸外国の歴史や文化を考えながら、芸術をいろいろな角度から理解し、鑑賞の能力や創造する能力を養うことを目標とした。細部は音楽、美術によって異なるので、それぞれに分けて報告する。

### <音楽>

#### ・実践内容

最初の時間に生徒から課題学習として取り組みたいことについて希望を取り、それになるべく沿いながら、上記の目標を達成すべく、大きく分けてVTRによる音楽鑑賞とリコーダーを中心とした器楽アンサンブルの学習計画を立てた。音楽鑑賞の具体的な例としては、

1. 作曲家の生涯と作品に関するもの——バッハ、モーツァルト、ベートーベン、ショパンなど
2. 演奏家（演奏団体）に関するもの——ケンブリッジバスカーズ、ベルニゲローデ合唱団、小沢征爾、ウィーンフィルハーモニー管弦楽団など
3. 音楽映画に関するもの——「サウンド・オブ・ミュージック」、「オーケストラの少女」など
4. 楽器に関するもの——和太鼓、日本の笛、パンフルート、オーケストラの打楽器など
5. 映像と音楽に関するもの——「The Orchestra」

などが挙げられ、音楽を視覚と聴覚から多面的にとらえることができるような、また音楽に対する興味をさらに増すような教材を幅広く取り上げるよう工夫した。

次に器楽アンサンブルは、リコーダーに鍵盤楽器や打楽器を加えたりすることによって、楽しみながらアンサンブルの能力を養うようにした。実際に演奏した曲は、

- (1) Yesterday (2)野ばら (3)牧人の歌 (4)ポギー大佐 (5)「惑星」より木星 (6)小さな白鳥たちの踊り (7)幸せの黄色いリボン (8)フィンランディア (9)お部屋を飾ろう

など、クラシックに限らずいろいろなジャンルの曲に取り組み、グループを組んで皆の前で発表したり、自分たちの演奏をテープに録音して思い出を作るなど、意欲的な活動も見られた。

#### ・実践上の問題点と課題

今年度の問題点は、音楽の人数が多くて2クラスに分けての同時展開となったために、演奏室と音楽教室を同時に使用せねばならなかったことである。つまり、音楽教室は演奏室に比べ広さや設備の面でかなりの制約があり、課題学習実施の上で、少なからず支障をきたした。

次に、学習内容を創造という面から振り返ってみると、美術のように創作活動が中心の教科と違って、音楽での創作活動の実践は困難なものがあり、特に2年生という音楽の基礎を教える段階の生徒達にとって、例えば、作曲をさせるにしても創造的な演奏活動をさせるにしても、少々、限界があるように思えた。そのため今年度は、教師主導型の一斉授業に偏りがちであったが、もっと生徒が主体的に活動する場を持たせてやることが今後の課題ではないかと考えられる。

## <美術>

美術の教科の各分野で計画している以外の学習を深めるよう計画したが、時間的な都合で鑑賞・絵画（版画）・デザイン・工芸の領域で実施した。教育現場で、生徒の「生きた反応」が、最近ややもすると衰退気味の感じを受ける。表現活動においても、例えば「絵を描く」のではなく、対象物に「描かされて」いるし、色をただ単に「塗って」いる感すらある。これは、「見る力」が不十分で概念で判断しているのであろう。

「見る」ことは、深く感じなくてはならない。これが相互波及し合い、融合することが美術教育の根源であるし、造形の原理だと思う。

### 1. 観察力（鑑賞力）

日頃生徒との接触から感じられるのは、ものをじっくり「見る力」—「観察力」の欠如ということである。例えば、ジョット作「金門の再会」（壁画、フレスコ、1305～6年頃作）—金門の二本の柱の光線が左右違って表現されているのに気付くのはあまりいない。

このような表現方法から、フランスプリミチーフ絵画と、ピカソの作品を関連して鑑賞する。方位について、正面性と側面性を同時に表現されているのに気付かせる。これらの表現は、「印象しやすく表現しやすい方法」を創造したのであろう。この表現方法の「型」を作品から鑑賞することから学習を始めた。

婦人像（壁画） テーベ（紀元14世紀）



婦人像 ピカソ



※正面性と側面性の表現の型

左図の例の他に

ピカソーゲルニカ

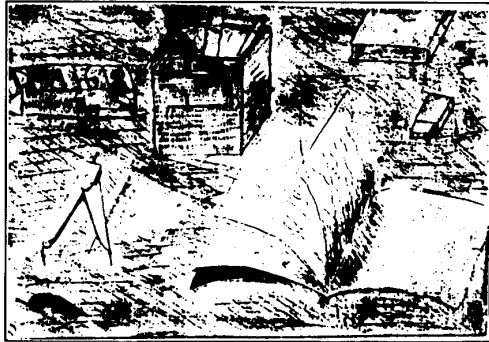
光琳—紅梅、白梅図屏風など

### 2. 版画

版画で一番古いのは木版画である。木版は西洋、東洋ともに起源を異にしているが、ともに宗教に必要な印刷物をつくるために考えられたもので、機械が発明されるまでは印刷物の製作上最も必要な技術であった。



この木版も江戸時代になると大衆のために作られる浮世絵になり非常に発達した。この浮世絵は三者共同であったが、創作版画は、美術家の創作による版画である。版の種類は凸版、凹版、孔版、平版とあるが、平板の中に含まれる応用ジンク版が簡単である。いわゆるエッチングプレス機がなくても、よく似た作品が出来て重宝である。



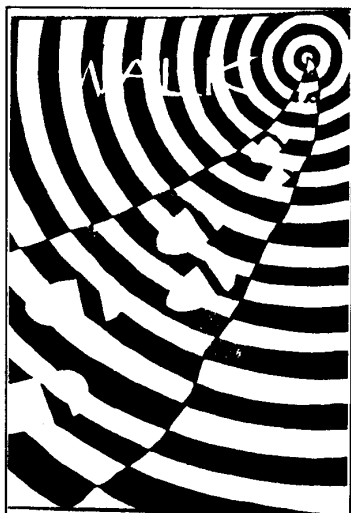
応用ジンク版  
(生徒作品)  
オフセット印刷  
の下書きに似た技  
法で、紙をジンク  
版の代わりにした  
したものである。

### 技法

- (1) アラビヤゴムノリを溶き、画面に効果を考えながら塗る。
- (2) アラビヤゴムノリが乾くのを待ち、ペン先か、鉄筆などでひっかくようにして絵を描く。
- (3) 画面全体に好みの油絵具を綿につけて強くすり込む。～綿に水をしめして洗う。
- (4) 油絵具が乾くのを待って、綿に水をしめして、アラビヤゴムのりを拭い去る。

### 3. デザイン

自由課題ーデザインボードB 3大 (生徒作品)



発送からイメージして制作して見よう。

- A. 自分自身に語りかける。
  - ー自己の生活を規則正しくするため。
  - ー自己自身に呼びかける。
- B. 心の底から言いたいこと、叫びたいこと。
  - ー人間はお互い同志、もっと仲良くしよう。戦争のない平和な社会。より高い理想をもとう……。
- C. 身辺のことから、より広い社会に向かって。
  - ー資源を大切にしよう。公害問題等。

### 4. キーホルダー

各自、好みのキーホルダーをつくる。

・実践上の問題点と課題

授業では、基礎的な学習を深めるよう進めているが、人数の割合と、施設、設備が不十分で、創作活動はかなり制限せざるを得なかった。

理想的には、生徒が主体的に創作活動ができる場所を考えることが、今後の課題であると思う。

# 技術・家庭科

## 〈技術〉

### 1. 教科の目標

生活に必要な基礎的な知識と技術の習得を通して、家庭生活や社会生活と技術とのかかわりについて理解を深め、進んで工夫し創造する能力と実践的な態度を育てる。

### 2. 実践の概要

新教育課程に基づく授業の中で、課題学習的な学習活動を組んでいくことにし、下記の要領で計画・実践した。

(1) 実践した単元名と学年 単元名——情報基礎 実施学年——第3学年

(2) 実施計画 (合計30時間)

1. 情報とコンピュータ——1時間
2. コンピュータのしくみ——4時間
3. コンピュータの利用——8時間
4. コンピュータプログラミングの基礎——15時間
5. コンピュータと社会生活とのかかわり——2時間

上記、実施計画の中で4. のコンピュータプログラミングの基礎において、グラフィック画面を使用したBASICのプログラミング演習を設定し、生徒個々の発想によるグラフィック作品の作成(年賀状、バースディカード、クリスマスカード等のカードのデザイン)を課題とした。

なお、この題材を課題としたのは下記の理由による。

- ・生徒の興味・関心が高く、初心者でも比較的容易にプログラムの構造を知ることができ、自己の創造性を生かした作品として、完成時の満足感を味わうことができる。
- ・BASICによるプログラミング演習をとおして、コンピュータの基礎的技術を習得させ、実際に活用する能力と態度を育てることができる。
- ・作成したプログラムのリストおよび実行画面のハードコピーをとることにより、周辺機器の操作および機能を理解することができる。
- ・作成したプログラムを発表する場を設けることにより、互いのプログラムの構造を知り、コンピュータのはたらきについて理解を深めることができる。

### 3. 授業実践の結果

基本的にコンピュータの操作やプログラミングに経験のない生徒であったが、興味・関心は非常に深く、学習に取り組む姿勢も積極的であった。その結果、全ての生徒が課題をやり遂げ、当初の学習目標を達成した。図1に生徒の作品例を示す。

### 4. 実践上の問題点

プログラミングの学習は、様々なコマンドを確実に理解しながら一步一步進める必要があり、そのためにはまず授業時間の確保が必要である。また、それと同時に効果的・効率的に学習を行うためには施設設備の充実がなされなければならない。



図1 生徒の作品例

## <家庭>

### 1. 目標

家庭科では、日々次の点を目標に掲げ、実践に取り組んでいる。

- ①習得した知識や技術を積極的に活用し、生活を工夫したり、創造する力、実践力を育てる。
- ②基礎基本の学習の中に、個性を生かせる題材を選び、個の能力に応じて創造・完成の喜びを味わわせる。
- ③家庭生活や社会生活との関わりにも目を向け、応用発展させていく意欲を育てる。

### 2. 実践と概要

各学年での授業実践の中で次のような課題学習を取り入れている(例)。

- 1年 被服1 (エプロンの製作) —— 布地の選定、デザインの工夫など
- 2年 食物1 —— 3日分の献立作成及び家庭実習、価格調査、表示・マーク調査など
- 3年 住居 —— クリスマスリースの製作、清掃用具・方法調査など

### <具体的実践例>

2年生における具体的実践と生徒および家族の感想——提出レポートより抜粋——

第1日 朝食				
献立：食パン、ハム入り目玉焼き、サラダ、牛乳				
献立	材 料	分 量		色分け
		1人(g)	5人(g)	
食 パン	食 ぱ ん	100	500	
	マーガリン	6	30	
目 玉 焼 き	卵	60	300	
	ロースハム	10	50	
	塩 こしょう	少々 少々	適当 適当	
サ ラ ダ	レ タ ス	20	100	
	き ゅ う り	30	150	
	ト マ ト	20	100	
	ドレッシング	20cc	100cc	
牛 乳	牛 乳	200cc	1000cc	

#### ・調理法

1. 食パンはトースターで2分～3分トーストする。
2. 目玉焼きは、熱したフライパンにバターをとかし、卵とハムを入れ、塩とこしょうをふり、水を少し入れ、ふたをして蒸す。
3. サラダはよく水であらい、きゅうりはななめ輪切り、レタスは適当な大きさ、トマトは8分の1にそれぞれ切る。

#### 感想

- ・初めて1人で朝食を作った。手際が悪くてすごく時間がかかった。
- ・でも、おいしくできた。

#### 感想

—— 3日間を振り返って——

最初の日は豪華だったが、だんだん質素になっていった。でもどの食事でも一生懸命に作っておいしい食事を作れた。3日間の全食事を作るのは、献立を考え、材料を選び、そして買い、作るという作業をしなければいけなかったのが、大変だった。毎日この仕事をしている母は、さぞ苦労しているのではないかと思う。母に食事を作ってもらったのが当たり前と思っていたのが、この課題を通じて主婦の苦労というものを身をもって感じた。今は、母に感謝したいと思っている。この課題のねらいはこれだったのではないか、僕はそう思う。

#### 母の感想

3日間の食事を作ると聞いて、私は3日間何をして過ごそうかな——。あれも、これも——と楽しみにしていました。いざ作るとなると、1日目は、質問責めで、あれはどこにある？これは？等々、自分で作った方が楽かな——と。しかし、3日目ともなれば、ずいぶん慣れて、手順もよくなり、質問も少なくなりました。味付け等、家族の評判は、なかなか。みんな「おいしいね」といいながら食べていました。これからの時代、男性も家事を分担することが多くなると思いますので、こういった課題は、大歓迎です。

### 3. まとめ

家庭科の学習においては、課題学習となる題材は多い。作業を伴うものが多く、各自の個性を表現しやすいし、創造する喜びを味わわせることができ、生き生きとした学習ができるので、今後もこの教科の特性を十分発揮していきたい。

# 英 語 科

本年度、中学校の選択・裁量時間として英語科ではAETとのチームティーチングを実践した。以下その概要を述べる。

## 1. 目標

生徒の「コミュニケーション」能力を高めることを目標として、『日常のJTEによる授業との関連をもたせるため、教科書の既習事項の定着を図る活動をおこなう』・『native speaker の話すことがわかった、native speaker に自分の英語が通じたという経験をできるだけさせる』ことを基本的な実践方針とした。

## 2. 具体的実践例

### 1) 中学校1年生

◎インタビューゲーム・・・1学期のまとめとして既習材料を用いて、事前に家庭状況をHRTに確認した上で、① What's your mother's name? ② What animal does she like? ③ What's her favorite food? ④ When is her birthday? ⑤ Can she drive? という5つの質問事項をできるだけ多くの人にきいて(JTE、AETも加わる)その返答を書きとめ、その数を競う。

評価：生徒はおしなべてリラックスして英語を使っていた。なかにはユニークな答えで笑いをとる者もいた。習った英語をとにかく使ってみるという当初のねらいは達成できたと思う。

### 2) 中学校2年生

◎リスニングを中心とした活動・・・日本の朝食やクリスマスについてJTEが生徒に英語で質問することによりAETに説明した後、AETがイギリスの朝食やクリスマスについて説明する。あるいは、単語レベルでのイギリス英語とアメリカ英語の違いについてAETが説明する。

評価：このようなことについてはJTEが説明できないことであり、また生徒にとっては初めて聞く話なので生徒はとても興味深くAETの話聞いた。AETが使う生徒が理解しにくいことについては日本語で説明してやる必要はあるが、英語に対する興味付けという点では有効である。

◎インタビュー・・・生徒が通訳になりJTEが日本語で言ったことをAETに英語で尋ね、それを日本語で説明する。

評価：生徒の Where do you live now? という質問に対してAETが In Fukuyama. と答えたが、この場合は福山のどこに住んでいるのかを知りたいわけで、こんなときはどうしたらよいのかなどその場に応じた表現を考えさせることができた。また、What vegetables don't you like? という質問に Tomatoes. と答えた時に、「トマトおいしいのに」と言う生徒もあり、AETと生徒がそのことについてお互いの意見を言い合い、生徒はAETをより身近かに感じたようで授業の雰囲気になごやかになった。この活動は予想以上に生徒が積極的にとりくんだ活動の1つである。

### 3) 中学校3年生

◎「完了形」を用いた活動・・・通常の授業で学習した「完了形」の定着をはかるため、クラスを2つに分け、一方のグループ(約20名)をJTEが担当し、もう一方のグループ(約20名)をAETが担当し、授業の半ば(25分)で交代するという形式の授業をおこなった。JTEはプリントを用いて、次の週の活動のための準備となる活動をし、AETはターゲットに設定した構文を中心に生徒と言語活動をおこなった。

評価：生徒はリラックスして、授業を楽しんだ。クラス一斉の授業の時よりもAETを身近に感じたようである。AETは1グループあたり25分という時間が短すぎるし、一斉授業も分割授業も大した変わりはないと評価している。確かにAETの活動自体は一斉授業と分割授業で大きな変化はなかった。当初のねらいとしては、AETができるだけ多くの生徒に直接語りかけることにより、「英語を使っているんだ」という実感を生徒にもたせるつもりであったが、このことについては今後の課題である。

◎ペアワークを中心にした活動・・・はじめにAETが活動の内容・ルールを説明する。JTEが日本語で説明を補うことも必要に応じてする。次に、活動で用いる表現の説明と口頭練習を行う。授業の後半は主にペアワークに当てるが、答え合わせや発表を行うこともある。

#### ☆活動内容の主なもの

① The Car Dealer・・・インタビューによってお客が必要な車をリストから選び出す。

② The Marriage Bureau・・・「関係代名詞 who」を中心としたインタビューによって理想の相手をリストから選び出す。

③ Love Match・・・結婚相談所への応募の手紙をインタビューとスキニングによって応募者リストにまとめる。リストを見比べてペアで話し合い、理想の相手を選び出す。その際、日本語を使ってもよいが、AETに選んだ理由を説明する時は英語を使う。

評価：生徒同士のコミュニケーション活動に終始したため、直接AETと対話するチャンスを与えてやることができなかった。「コミュニケーションの能力」を高めるための基本的研究と実践を行うために、たとえば、一斉授業において、効果的な活動(ペアワークなど)とAETと生徒との直接の対話をどのようにバランスよく組み入れていくかということなどについて考えていく必要がある。

### 3. おわりに

AETとのチームティーチングの授業によって生徒のコミュニケーション能力がどのように高まったのか述べることは難しい。しかし、確実に言えることは大多数の生徒はこの授業を楽しみにしているということである。生徒はAETから「生の英語」ばかりでなく、AETという1人の外国人をとおして、その人の考え方・人柄・イギリスの文化や習慣の一端を学ぶ。このことは今後ますます国際化される社会で生きていく生徒にとって貴重な体験であると思う。

当校におけるチームティーチングの実践はまだまだ手探りの状態であるが、優れた先行実践に学びながら独自のものを創り出していくべくさらなる内的inputに力を注いでいくつもりである。

# 中学校1年生「ライフ」の実践

第1学年担任団

中・高6カ年一貫教育を実施してゆくためには、各教科・特別活動及び道徳のそれぞれの活動における目標を明確化する必要があるが、それ以上にこれら3領域を統合的に考え、生徒が6カ年という長期間にわたる学校生活を、いかに充実させて過ごしてゆくかが大きな問題となってきた。この問題を解決するためには、生徒と教師の両者共、中学校に入学した最初の段階で、6年間何を目指して活動してゆけばよいのかということを理解しておく必要があると考える。そこで「ライフ」においては、当校が従来から実践してきた「ゆとりの時間」の考え方を踏まえ、生徒自らが生きてゆくことの意味を考えたり、自らの人生を切り拓くための基礎的な力を養うことを目標としている。

1992年度の第1学年においては、昨年度の成果のうえに、新しい試みや従来の学習をより整理したものを実施し、「生きる営み」について考えたり、より「心豊か」に生きてゆく力を身につけるきっかけとしたい。

## I. 1992年度の展開内容

### 1. ふれあい宿泊研修（4月～5月）

#### 1) ねらい

第1学年の生徒たちが、今後の附属福山中・高等学校での生活を円滑に送ることができるように、また充実したものとすることができるようにするために、入学当初のこの時期だからこそできる『仲間づくり』を、宿泊を伴った集団生活の中で実施する。

#### 2) 目標

- ①生徒同士が交流する場を設定し、お互いの理解を深めることができるようにする。
- ②教師の思いを生徒に伝える場を設定し、教師と生徒の心の交流を図ることができるようにする。
- ③集団生活・行動における基本的な約束事項やマナーを実際場で体験し、今後の生活に生かすことができるようにする。

#### 3) 研修内容

##### ①体を動かす

- ◎晴天時屋外……球技（ソフト、フット、ドッジ）・ウォークラリー
- ◎雨天時屋内……長縄跳び、ソフトバレーボール、シンキングゲーム

##### ②お互いを知る

- ◎グループワークトレーニング（GWT）
- ◎教師の中学生・高校生時代を語る

#### 4) まとめ

- ①研修後の感想を、冊子としてまとめる。（別冊資料参照）

### 2. わたしたちの学校のある福山市《福山の過去・現在・未来》（6月～11月）

#### 1) 福山の過去の歴史

- ①各クラスとも、「再発見！ふくやま」という共通のテーマで活動し、学友祭へ参加する。

## ②ねらい

物心がつき、自分自身の手で自分の将来を設計しようとするときに、人は未来に対する限らない可能性を求め、そして努力する。しかし、人生の航海というものは、波静かな時ばかりではない。雨風に打たれ、自分がどこにいるのか、どちらの方向に進めば目的地に着くかが分からなくなることもしばしばある。そのようなときに、一定の方向を指し示してくれる磁石があればどんなに心強いただろう。その一つには、先輩が歩いて来た道から与えてくれるアドバイスがあるだろう。また、自分の生い立ちを振り返り今まで自分がどのようにやって来たかを考え、今の自分を見つめ、そしてこうすべきではないかといろいろ試しながら未来を切りひらこうとする一面ももっている。しかし、先輩のアドバイスはその人の生きて来た「歴史」から得た教訓であり、自分のやり方を振り返るのも、「歴史」を振り返ることだ。伝記物語や歴史上の人物の話を参考にするのも、どれも「歴史」から何かを自分が参考として取り入れ、どう進むべきかを示す「磁石」としていると言えるだろう。

町の歴史も同じようなところがある。わたしたちの通っている、広島大学附属福山中・高等学校のある、福山市。この町は、一体どのような歴史をもっているのだろうか？この福山という町はいつごろからできあがり、どんな出来事があり、どんな人物が行き来したのか。そうした長い年月の積み重ねの末に、今の福山はどうなっているのか。そして、将来に向けて、どのように変わっていきこうとしているのだろうか。いや、どのように変わるべきなのだろうか。

そういった自分の町の移り変わりを考えることによって、自分が住んでいる町とどうかかわっていけば良いのかが分かって来るだろう。仮に自分の町の歴史でなくても、あなたにたくさんアドバイスを与えてくれるはずだ。

そこで「ライフ」では、福山の過去・現在を調べたり、実際に見学したりしてそれをまとめ、まずは「福山」をもっとよく知ろうというところから始めようと思う。そこからどんな未来が見えて来るのか、あるいはその他の何が見えて来るのかは、今のところ、よく分からない。しかしまず、とりあえずは、わたしたちの学校のある町（わたしたちの郷土、人によっては第二の郷土と言える福山）を調べてみようではないか。

## ③活動の内容

◎調べてみよう、行ってみよう、聞いてみよう

○史跡の町鞆の浦

- ・スサノオノミコトと一宮 ・京都の祇園さんと福山の祇園さん ・多くのお寺の歴史
- ・万葉集とむろの木 ・対潮楼と朝鮮通信使 ・ささやき橋 ・沼名前神社の御手火祭
- ・御弓神事 ・秋祭り ・室町幕府と鞆 ・山中鹿之助の首塚 ・鞆城跡
- ・弁天島（百貫島）の塔 ・力石 ・かじや ・平賀源内 ・頼山陽 ・七卿落遺跡
- ・坂本龍馬といろは丸 ・いろは丸博物館 ・明治維新と保命酒 ・仙酔島の砂洲
- ・鯛網 ・宮城道雄……

○明王院・草戸稲荷神社・草戸千軒遺跡あと（芦田川）・草戸千軒遺跡資料館



○福山城……

◎作ってみよう

○鞆の立体地図

○福山市の立体地図

○対潮楼からの景色

○福山城の模型

○鯛の大きな張り子

○草戸千軒の復元

○明王院五重の塔……

④学友祭への参加・発表までの流れ

◎自分たちの班で調べてみたり、作ってみたら面白そうなものを考え、事前調査並びに資料収集を行う

○文献、パンフレット、などの収集……

○現地調査、ビデオ撮影、写真撮影……

○発表資料、模型の作成……

◎村上正名先生のお話し

○郷土の歴史を学習する意義

○福山の歴史を学習するうえにおいて、「鞆」を学習する意義

◎各クラス・グループで活動の日程を話し合い、決める

◎鞆の浦へ行き、現地調査、資料集め

○あらかじめ調べようと思う場所を決め、班行動の日程や調査の手段、記録の方法等を決める

◎夏休みから2学期当初にかけて各班で資料をまとめ、製作を行う

◎学友祭への参加・発表（発表の2本柱）

○紙上発表（プリント・模造紙に、文章や写真・スケッチ・ビデオなど）

○製作発表（福山の歴史に関係したものづくり）

⑤まとめ

発表の内容や感想を、冊子としてまとめる。（別冊資料参照）

## 2) 福山の現在

①NKK日本鋼管福山製鉄所について学習する。

②ねらい

ライフの学習の一環として、今回は、わたしたちの学校のある「現在の福山市」をさぐってみる。中でも産業の面から「現在の福山市」を考えることを目的とし、NKK日本鋼管福山製鉄所の見学を行うことにより、そのきっかけとする。

③事前学習

知っていること、聞きたいことをあらかじめまとめ、製鉄所側と打ち合わせをおこなったうえで、問題意識をもって見学。

④まとめ

見学後の感想を、冊子としてまとめる。（別冊資料参照）

### 3) 福山の未来

今回は具体的に考えることはできなかったが、過去・現在を見つめたことが、将来のことを考える一つの指針になると考える。

## 3. 芸術の秋（11月～12月）

### 1) 大原美術館への遠足

#### ①ねらい

大原美術館の60年間の軌跡を学習し、先人の努力と人生をたどることで、それに携わった人達の生き方から学ぶと共に、日本でも有数の芸術作品に触れる。

#### ②事前学習ビデオの概要

「夢かける～大原美術館の軌跡～」

#### ◎日本の西洋美術館建築の、大きな二つの流れ

- ・大原孫三郎、児島虎次郎→「大原美術館」
- ・松方幸次郎（松方コレクション）→「共楽美術館」となるはずであった  
→結局「国立西洋美術館」となり個人ではその夢を果たせなかった

#### ◎大原美術館—日本で最初の西洋美術館

- ・大原孫三郎—倉敷紡績（クラボウ）、倉敷絹織（クラレ）、中国銀行などの創設
- ・児島虎次郎—画家、絵画収集の主役
- ・石井十次—岡山孤児院の創設者、孫三郎への精神的影響者

#### ◎松方幸次郎—川崎造船社長

- ・日本で最初の西洋美術館をつくろうとしていたが、第二次大戦前の世界恐慌のあおりで、会社は倒産。個人としては結局果たせず。しかしそのコレクションは、国立西洋美術館の創設のもととなる。
- ・「松方コレクション」と呼ばれる大量の美術品をヨーロッパで購入。浮世絵も大量に買い戻す。
- ・コレクションのうち約300点はイギリスで焼失。
- ・フランスで購入し保管していた約400点は、第二次大戦のためフランス政府に差し押さえられた。しかし、サンフランシスコ講和条約締結の後、日本政府からの返還要求で、17点をフランスに残し、大半は「国立西洋美術館」を建設するという条件付きで返還される。
- ・国立西洋美術館は「ロダン彫刻」の収集としては、世界で2番目の規模。「考える人」「地獄の門」など

### 2) 映画観賞「老人と海」

#### ①ねらい

ヘミングウェイの代表的な作品である「老人と海」を視聴し、文学作品と映像との違いなども考えさせながら、芸術性の高い映像文化に接する。

#### 4. 掃除について考える（12月）

##### 1) ねらい

どうしたらよい掃除ができるかを、掃除の知識テストなどをおこないながら考えさせる。  
また、詩の学習を通し、感性の面からも掃除とはなにかを考える。

##### 2) 知識として知ること

- ・正しいほうきのかけかた
- ・雑巾のゆすぎかた
- ・掃除用具の後始末のしかた
- ・トイレの掃除のしかた
- ・外掃除のしかた
- ・掃除用具の使い方
- ・掃除用具の管理のしかた
- ・掃除の手順、流れ
- ・掃除のこつ
- ・小、中、大掃除の使い分け

##### 3) 詩の学習を通して、感性としてつかむこと

###### ①「カーチャ」 バルトオ作 福井研介訳

◎最後の行の『あたいは、実がなるのをまっているのよ』というカーチャのことば。自分の仕事はしないくせに、働いた結果だけはいただくという精神のずるさ。掃除しなくても、汚いところに座るのはいやだ、という精神の矛盾。ここのところを十分に感じさせ、「自分達は、『カーチャ』になるのかどうか」を考えさせる。

###### ②「便所掃除」 浜口国雄作（真壁仁編『詩の中にめざめる日本』岩波新書所収）

◎まず、教師が生徒の前でこの詩を朗々と感情を込めて読み、その後の生徒の反応が静かになっているようであれば、次の説明だけをして、考えさせる。それだけ「感性」に訴える力がこの詩にはあると思う。もし、生徒の反応がざわついたもので、これは考えていないなどと思われるものだったら、教師自身の掃除に対する思いか、この詩を読んで感じられたことを話して補足する。詩の朗読は、棒読みにならぬように十分注意すること。

###### ○説明

「作者は、旧国鉄の職員だった人です。戦後間もなくこの詩は書かれましたが、当時は、便所掃除は新入社員の仕事だったそうです。戦争から帰って来た浜口さんは、『美しい社会をつくるには、便所掃除などの身近なところからひとつづつきれいにしていかなくては、社会全体はきれいにならない。』と考えて、あのむかつくような匂いのする便所掃除に取り組んだそうです。今でこそ、公衆便所は少しはきれいになりつつありますが、一昔前まではそれはひどい状況でした。そのようにひどい状態でしたが、浜口さんは美しい社会をつくろうという意欲をもって、この掃除に取り組まれたのです。それが戦後の民主主義の社会をつくる第一歩だと思われたからです。しかし、そうはいつでも、やっぱり最初は人にみられると、とても恥ずかしかったそうです。でも、この詩を書いたからは、自分が日本一便所掃除のうまい人間だと自信がもてるようになったし、自分の子どもにもいばれるようになったということです。どうですか、この詩を読んだ感想

は？」

## 5. 食生活を考える (12月)

### 1) ねらい

正月を前に、年末の一つの風物詩にもなっている干し柿をつくり、年初めにはそれを食べながら一年の計を思いつつ、食文化に触れる一つのきっかけとする。

## 6. 読書について考える (1月～2月)

### 1) ねらい

偏りがちな自分の読書ジャンルを、友達の推薦文を読んだりする中で広げるようにし、幅広い分野にわたって興味・関心をもつ習慣や態度を養い、自分自身の視野を広くもつことができるようにする。

## 7. 自分の将来について考える (2月～3月)

### 1) ねらい

6年間に培う力は、将来にわたって自分自身の中で生きて働く力でなければならない。「ライフ」で獲得しようとしている力は、まさにこの力である。この力は一朝一夕には身につかない。また、この力を生かして自己実現を図るべき将来への展望、人生設計を立てることも一朝一夕にはできない。確実な力を身につける一方で、将来の夢を考え、その実現のための道筋をまた自分自身で見付けてゆくことを、第1学年の締めくくりとして考えさせる。

## Ⅱ. 反省と課題

4月に始めた「ライフ」の学習も、多くの成果や課題を残しながらここまでやってきた。「ライフ＝課題学習」は、昨年度より授業の一環としてスタートしたものだが、この学習がもつ意義は、各教科の学習と特別活動・道徳の分野の要素を含み、大きく言えば、「自分の生き方について考える」という側面をもっているものだという点である。だから、つきつめてやればやるほど、際限なく広がりを見せる学習ではなかろうか。そういう意義のもとに、具体的には、一体何を取り組みの対象とすべきなのかという問題が、私達担任の頭をしばらく悩ませた。

幸いにも、何年か前の意欲的な生徒が取り組んだ「軀の歴史」の成果が、頭の中に強烈に残っていたので、「ライフ」の学習の一つの大きな柱としては、そのときにできなかったことや、やり残したことをさらに発展させて調べたりまとめたりすれば、素晴らしいものができるのではないかという思いがあった。そしてこの点では、学友祭への参加・発表・まとめという大きな山を越えることができたと思う。オリープでの全体説明に始まり、各班での下調べ、村上正名先生の、多くの考えるべきことを示してくださったお話、現地調査、仕上げ、製作、発表と続き、それぞれの人がそれぞれの立場で頑張り、大変忙しかったと思う。はっきり言って、初めのうちは、「何故このようなことをしなければならないのか？面倒臭い……」と思う生徒も多かったようだが、実際に現地で

実物を見たり触れたりするうちに、実感として歴史のもつ意味やその深さを感じることができるようになった生徒もまた多い。歴史のもつ重み、その意味は、その気になって見なければ、ともすれば見過ごしてしまうこともある。しかし、人の歴史であれ、街の歴史であれ、多くの時間が流れる中で、多くの事が積み重ねられた結果としての「今」がある。活動を通じて、班で協力することの大切さや、計画的に早くから物事に取り組まなければならないことを強く感じた生徒も多い。が、しかし、それにもましてわたしたちが考え続けてゆかなければならないのは、結果だけではなく、それぞれが歩んで来た「歴史に思いをよせる」「歴史に学ぶ」という姿勢ではないかと思う。

その他の実践も、ここ何年間かの生徒の様子をみてきた中で、学ばせておきたい、体験させておきたい、考えさせておきたいと感じたことを整理し、工夫し直して実施したものである。ともすれば、短時間のうちに知識として詰め込み、SHRやLHRの時間だけで何とかしてしまおうとしがちではあるが、それだけでは、生徒達の血となり肉となり、生涯にわたって生きて働く力とはなりにくい。十分に取り組むためには、やはり時間と工夫が必要である。6カ年の学校生活をにらみながら、今必要と思われるものや、時間をかけないとできないものをこなして来たつもりではある。しかし、やはり、不十分な取り組みでしかないように思えて仕方がないのは、「ライフ」という名前の奥に隠れて見えない深淵のせいであろうか。

今、週休二日制が導入され、学校教育自体の転換を考えることを余儀なくされている現状である。しかし、休みは増えても、そのつけをどこに持っていかうかということに汲々としている現実もまたある。授業の確保のために、「学校行事の精選」などという言葉もまことしやかに囁かれるが、教育が「人格の形成を図る」ことを目的としている限り、やはりこの「ライフ」の基本的な考え方は、将来にわたっても大切なものであり続けると信じたい。

また、「教育は国家百年の計である」とも言われるように、その真の成果は、今後を待たなければならない面も否めない。今年度の「ライフ」の学習は、その都度、まとめられるものは別冊冊子としてまとめてきたが、今年蒔かれた種がどのように芽を出し、どのように成長するかは、今後の指導にもかかっていると見える。

力強く、逞しく、自らの力で、自らの未来を主体的に切り拓くことのできる生徒の育成。「ライフ」は時間的な面では勿論のこと、その基本的な考え方は、その可能性を大きく秘めており、それらを十二分に生かすのは、ひとえに教師の姿勢によるところが大であると考え。